

古事記傳

四十二

史部
第一八號
三函
共四冊

| | | | | |
|-----|-----|-----|------|------|
| | | | | 和書門類 |
| | | | 四二〇號 | |
| | | 三一函 | | |
| | 一三架 | | | |
| 四八冊 | | | | |

| | | | |
|------|------|-----|--|
| 庫文閣内 | | | |
| 二七〇函 | 四二〇號 | 和書類 | |
| 六八架 | | | |

| | |
|------|---------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 42520 |
| 冊數 | 48 (45) |
| 函號 | 270 16 |



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



又一時天皇登幸高城之山
爾大稻出卯天皇以唯鏡
結之時其鏡益而宇多岐依
...



古事記傳四十二之卷

朝倉宮下卷

本居宣長謹撰

又アル一時トキ天皇スメラミコト登幸カツラキ葛城之山ヤマノウヘ上ホリイデマシキ

爾コハニ大猪オホ出イテ即ナリ天皇カフヲ以モ鳴鏑チテ射ソノ其キ

猪ヘル之時トキニ其ソノ猪イカリテ怒ウ而タ宇多キ岐ヨリ依ク來テ

宇多カレ岐スメラミコト三ソノ故ウタ天皇キヲ畏カレ其コ宇多ミ岐テ



古事記傳四十二

一



登坐榛上爾歌曰夜須美斯志

和賀意富岐美能阿蘇婆志斯

志斯能夜美斯志能宇多岐加

斯古美和賀爾空能煩理斯阿

理袁能波理能紀能延陀

ハリノキノウニノボリマシキカレニウタヨミシタカヤスミ

葛城は上小出。山上は夜麻のみの訓傳を

○登幸書紀には獵野此記を然は見えざる

毛御哥小夜美斯志也あまは御獵を依傳し。○大猪を

意富韋也訓傳仁徳天皇の御哥小意富韋古也阿尾

御獵小は斯志也云ぞ常を。○鳴鏑上卷小出。傳十の

宇多岐也怒を依傳し。岐を書紀小枳字を書き

は清小濁小を書す。此夏首卷小委云至出雲風土記

秋鹿郡大野郷の処小和加布都奴志命の猪を狩給

あり事見え同郡小大野津神社宇多貴神社並

ハ非依加速を依傳し。俗言小宇那流也云不通

○古事記傳四十二

二

榛原の九て地を見む云は此上を係哥小猪名
野者見せぬ解松原何時か見せむ也巧係類
と萩の花の波里波良和吉奴都伎与良之母保
呂乃蘇比乃波里波良和吉奴都伎与良之母保
云一乃蘇比乃波里波良和吉奴都伎与良之母保
亦趣同を以て榛能衣著成此二首を衣と著云
らむ又榛字をサ小以て養也も書係不就を知係
多を以て通は一人もある信け也毎養を榛也字の通
書るのみなり。○夜須美斯志和賀意富岐美能二句
上ふ出。○阿蘇婆志斯也は射賜了係を云至九そ阿蘇
夫也了了於主也樂係係云也。其事は傳世の廿又廣
く如此係事を云至。上卷小鳥遊也巧係も鳥を狩係
こ也なり。傳十四の字於係物語小も弓射係事をあそ
は係也巧も其外甕栗官段哥以阿蘇毘久流志毘賀波

多傳尔書紀天智卷哥小于知波志能都梅能阿素弭尔
万葉三十三小世間之遊道尔五十七小鳥梅能波奈家
布能阿素毘尔阿比美都流可母鳥梅能波奈多乎利加
射志互阿蘇倍等母十三八丁小云之登之而國見所遊
拾遺集下雜詞書小御基巧をばけ係を也如所至。俗皆今
云遊也大方同意なり源氏物語橋姫卷小琴をばは
し基又阿蘇夫を尊みて阿蘇婆須也云係も今世の言
云同し又阿蘇夫を尊みて阿蘇婆須也云係も今世の言
也を尊みては被成。○志斯能也猪之形也。○夜美斯志
能は病猪之小て俗小いはゆ係手肩猪なり書紀下は
此句を後小脱せ係を係係し。○宇多岐加斯古美ハ

スメラミコトイタクイカラシテヤサシタマヒツカサグノヒトバモコトクニ
天皇大忿而矢刺百官人等悉
ヤサシケレバカノヒトバモミナヤサセリカレスメラ
矢刺爾其人等亦皆矢刺故天
ミコトマタトハシメタマハクシカラバソノナラノラサネオノモクナラノリテ
皇亦問曰然告其名爾各告名
ヤハナタムトノリタマヒキコハニコタヘマラサクアレマツトハエタレバ
而彈矢於是答曰吾先見問故
アレマツナノリセムアハマガコトモニト
吾先為名告吾者雖惡事而一

コトヨコトモヒトコトコトサカノカミカツラ
言雖善事而一言言離之神葛
キノヒトコトヌレノオホカミナリトマラシタマヒキコハニ
城之一言主之大神者也天皇
スメラミコトカレコミテマラシタマハカレコレアガオホカミウツシ
於是惶畏而白恐我大神有字
オミマサムトハ
都志意美者自字下五不覺白
テオホミタチマタユミヤヲハシメテツカサグノ
而大御刀及弓矢始而脫百官

ヒトバモノケセルキヌヲヌガシメテヲロガミテタテツリキ。カレソノ
 人等所服之衣服以拜獻爾其
 ヒトコトヌレノオホカミテウチテソノサ、ゲモノヲウケタヒキカレ
 一言主大神手打受其捧物故
 スメラミコトノカヘリマストキ。ソノオホカミヤマヲクダリキミシテ
 天皇之還幸時其大神滿山末
 ハツセノヤマノクチニオクリマツリキ。カレコノヒトコトヌレ
 於長谷山口送奉故是一言主
 ノオホカミハソノトキニゾアラハレセシル。
 之大神者彼時所顯也

ツカサノヒトバモ
 百官人等かく聯きし依四字孝徳紀又諸の祝詞宣命
 をやふ多く見也古の定まりし書さるるありけむ百
 官は明宮段小出傳卅三の著紅紐之青摺衣は高津
 宮段小出傳卅六の給多麻波理互々訓法し百官
 人の受て服ふる方より云処をれば形也多麻比且や
 皇此與了賜多方○服を伎多理や訓法し下文又ハ伎
 服二字を書しれや也此は然訓てハ伎流や云言なく
 了語さしきば服字ハ必別ニ離て讀法さあり彼
 高津宮段見見えももさて此又かく装束の事を殊
 服やあり見合後法し
 小挙云る々下ふ其装束之状云る脱百官人等所
 服之衣服云るを此の事われはあり○山尾九て山又

表云云 峽八尾 知谷 高山尾上坂之御尾 萬葉小向峯八峯峯之上 鳥獸を以ての尾も同じく山

の商の引延よる處を云り 今集 上 哥 小 山 櫻 わが 見 小 来 春 霞 峯 小 尾 立 かくし 務 くれら 尾 意 なり 此事 序 の 解 小 云 傳 二 の 鹵 簿 漢 宮 儀 天子 車 駕 次第 謂 之 鹵 簿 兵 衛 以 甲 盾 居 外 為 前 導 皆 著 之 薄 故 曰 鹵 簿 美 由 伎 能 都 良 と 訓 了 天 武 紀 小 然 訓 了 美 由 伎 と 云 也 古 言 乃 万 葉 小 吾 行 ぶ ども あ せ ば 天 皇 の を ば 御 行 と 云 乃 了 〇 装 束 福 眞

寺本小を束装と作_レ上卷少も書紀神功卷一云云
云の文小も然あま_レ古小然も書りしあ_レ頁し
不傾を_レ決_レく寫_レ誤あ_レ頁し師の傾を損の意なりとて
上の相似ゆりのあ_レき穩あ_レ又延其字詳あ_レ又
佳を駿の誤あ_レむと云_レまど心得ん
強てい_レば_レ須_レ字の誤也して和加礼受と訓_レ頁_レき小也
字義を當らざれども分也とも注_レし他お思得_レ家
をハ無別の意は借_レるま_レき小も非_レ又
こやあ_レま_レれ_レ姑然訓あ_レや_レよく考_レあ_レ頁し
望を美
夜良志互見遣と云も万葉十十三小吾者見將遣君之
當波勢田社寛平縁起倭建命御哥小奈留美良乎美也
礼波止保志九除吾万葉五二十小安礼乎於伎互人者
安良自等九無王を伎美波那伎衰と訓_レ頁_レし
誰人云

云上卷小誰來我國忍_レ如此物言とある也似_レ依文
なり○亦如天皇之命とは彼方より母又同じさ_レる小
啓免奉ま_レり_レな_レる_レし傳十の○矢刺を上小見也三十葉○
其人等も向の山尾より登行ある人等なり○然_レは
上のお答を承て詔_レあり○告其名を曾能那表能
良佐泥と訓_レ頁_レし其と云も上の答の万葉七小名告
沙根一各_レ其方も此方なり○彈を波那多牟と訓
頁_レし中卷水垣宮段少も此字を書_レり○見問を登波
延多礼婆と訓_レ頁_レしこの古言なり○吾先為の先字無
き本どもあり今を真福寺本延佳本小依_レる○雖惡

事を麻賀許登母と訓了し御門祭祀詞小悪事古語麻
我許登とあり悪字小を泥むるなり次小引土左風
内小あり土記小凶事と書るを廣くする此字
を以て書るを色ども不ドモと訓て古語時さ万
小あり又師をゴガトドモと訓て古語時さ万
君之随意とある訓あり此と同一事なり此字
さ万を思ふは是ハハツトモウトモと訓て古語
ざれを此は異なる事の下なる而字を雖字小あり
る漢文の格を以て○善事を余基登と訓了し同格なり
て書るのみなり
万兼廿六丁小新年之始乃波都波流能家布敷流由伎
能伊夜之家餘其騰これ正月元日小雪の降るるを吉
事と云るなり九余基登と云るに言と事との異あり

事と書るを廣くして或書小雄峯帝獵葛
一言と詔了る意と次小云了或書小雄峯帝獵葛
誰哉神答曰也故世号曰一言主神或書小入峯
者問神名神答曰主由是以上之一言号曰一言主神或書小入峯
と云るハ一言主と申し御名小就て造り依○言離
説とこそ聞ゆ此記又風土記の趣小違了り
を許登佐加と訓了し土左國風土記小言放と書き書
紀神代卷小泉津事解之男孝徳卷小為事瑕之婢事瑕
此云居騰作柯と云る小依まり右の神代卷に神名
解字の意も通了りさて孝徳卷なるを瑕字ハ心得ぬ
ども許登佐加と云る由も右の神名の意と同一聞也
を速さうれ意を以て書れやあむさて

此、御名を負坐る由ハ、山事少ても吉事少ても此神の
一言小て解放離る意なるがし。然まバ言を借字小て
事離なり。事ハ山事吉事の事なり。さて山事を離賜ハ
むこととといふ。と思ふ人あむむ。其を御怒あざ小
因てハ人の吉事を離給ふこともあむむ。か無うむ。
御一言小て。山事も吉事も忽小解離ら。○葛城之。真
むといと。尊と可畏き大神小て坐まら。○葛城之。真
寺本小を。一言主之大神御名義上、文少て聞えり。
之字あし。○一言主之大神御名義上、文少て聞えり。
此神を大物主神なりとも。事代主神なりとも。○恐我大
も申以説あまど。其を詳あざ。ことあり。○恐我大
神中卷訶志比宮段少と。建内宿祢白恐我大神云。三傳
十の四葉 ○宇都志意美と現大身あり。と師の云き。依
十六葉 ○宇都志意美と現大身あり。と師の云き。依
如し。大御と云。書紀小。此時此大神の御答小。現人之

神と申給する事同じことあり。現人神とハ顯きて人
大の神を形ハ隠坐て顯小を見え賜ハざ。を是
を御身の現るく見え賜するを申給するなり。書紀神
代卷小。顯見蒼生此云宇都志積阿烏比等久佐少不傳
六二十考ふがし。大とハ尊みて申賜するなり。○有
者ハ麻佐牟登波と訓ふし。阿流を尊み。○注 宇の下
小都字ある本を誤なり。今を真福寺本小依きり。○所
服を師の祈勢流と訓まら。依宜し。中卷倭建命の御哥
小。那賀祈勢流とあり。傳廿八。○衣服をかの著紅紐青
摺衣スリキもなり。○献シテを百官人なり。献ス小を非代。天皇

の献賜ふ由なり。然るを献て賜ふとは訓。古語
ふを連ねて云ふことあり。必賜ふと云ふ古語
云ふ所なきも多し。奉ふと云ふ例なり。
賜ふを歡喜賜ふ態あり。書紀顯宗卷室壽御詞。手掌
膠亮拍上賜吾常世等。即此拍上。手を拍
段傳廿七の十五兼。持統卷小皇后即天皇位公卿百寮
小委云り考ふ所し。持統卷小皇后即天皇位公卿百寮
羅列匝拜而拍手馬續紀廿八。云く是日緇侶進退無
循法門之趣拍手歡喜一同俗人。三代實錄卅六。大極
殿成右大臣設宴於朝堂院含章堂賀落也。云く飛驒工
等二十許人不任感悅起座拍手哥舞合座大為咲樂貞
觀儀式踐祚大嘗會儀。卯日儀國栖奏古風五成悠紀國

奏國風四成次語部奏古詞次隼人司率隼人云く奏風
俗歌舞皇太子以下五位以上就庭中版跪拍手四度。別度
八遍神語所謂八六位以下亦如是。其小齋人不在拍限
角手是也云く。又春日祭儀云く觴三行拍手一段訖。又園并
韓神祭儀云く屬趨入就版申云御飯賜了神祇官拍
手三段酒盃三行了拍手一段。平野祭儀云鎮魂祭儀云
云く大膳進屬以下共起賜神祇官次大臣以下訖大膳
進就版申云御飯賜畢共拍手三度。先後唯觴三行亦拍手
一度。此事式云く北山抄十一月辰日節會儀云次供白
見えし。黒御酒次給臣下。称名給之。拍手飲之。土左日記哥ふおひ風の吹

于葛城山云々或説云時神与天皇相競有不遜之言天皇
皇大賤秦移土花神隨而隱神身已隱以祝代之初坐賀
茂之地後遷于此社而高野天皇宝字八年云々國記曰
云々多氏古事記曰云々大神答曰吾是吉事一言凶事
一言言放之葛木一言主神也天皇大驚下馬而拜百官
羅拜大神答拜又如天皇而射狩山獸言語相通者蓋疑
此時有不恭之言乎論者曰云々あき了皆彼風土記
の文を引宝字八年云々の事を續紀廿五不見了傳
十一小引了そ云々此風土記の説は高賀茂神也一言
主神を引了そ云々此高賀茂神也一言主神也一言
非遷此天皇の此山御獵の時現坐了一言主神の
よく似了了依て混ひ了了如くを了了放了了神の
御事は此記書紀不見了了高賀茂神の事は別事を引了
多傳き由を了了此一言主神の処は彼風土記を引了
誤なりふ不此事は傳十一此六十葉も辨了了りさ
て又世二役君小角い以依役行者咒術を以て鬼神
を使ひ葛城山より金峯山石橋を渡さむ事ありて
よ了了怒了了一言主神を縛了了り云故事ありて

後撰集よりあふ了了哥小も多くとみ哥書を吃あも見
えて人のよく知了了了事たり此事古くを靈異記小記
してその終了了了彼一語主大神者役行者前咒縛了了今
世不解脱了了佛の法を尊き物小了了さむ了了米の謀了了者
小賤了了佛の法を尊き物小了了さむ了了米の謀了了者
例の僧の了了了か了了了虚説たり右の説も小角み於可
ら造る多了了了或は其流を汲む輩を了了の造出あはこ
や那る了了了そとく此一言主大神の此天皇了了如こ
畏み賜多了了了か了了了み了了了御威徳了了了て尊き大神
小坐了了了のを小角が如き微賤き者のいかであよく
いさ了了了可了了了了妖言了了了そあ了了了け了了了か
角以葛城山小久了了了小觸了了了奉ら了了了居あり云了了其不
此大神の御怒了了了小觸了了了奉ら了了了居あり云了了其不
け了了了小角が事ハ續紀了了了小役君小角流了了了伊豆鳴初小
角住於葛木山以了了了術称韓國連廣足師焉後害其能了了了
以妖惑了了了故配了了了遠處了了了世相傳了了了云了了了汲水採薪
着不用了了了命了了了即了了了咒了了了縛了了了之了了了見了了了え了了了又小角を諫了了了
況此小も一言主神の御事以見え了了了又小角を諫了了了

跡を韓國連廣足なるをの靈異記小一言主神の謬
賜帝中書に依りていかるや大か多此らみてゆ偽
造るるを依るを○彼時所顯也○以上小宇都志意美
依きものをや
如く現御身の顯きて見え賜言るを云を依依し又中
志比宮殿小住吉大神の御事を此時其三柱大神之御
名者顯也○中依りて同く一言主大神申以御名の
始て顯坐依りてかやを思言也是の御名を依りて
されば然小のあり又御社も此時小始りて依りて
を思の依れ然らば宇都志意美坐む依りて覺らざり
き也天皇の申賜言るさ万御名又御社を依りて
よりありさ万○書紀云四年春二月天皇射獵於葛
城山忽見長人來望丹谷面貌容儀相似天皇天皇知是
神猶故問曰何處公也長人對曰現人之神先稱王諱然

後應道天皇答曰朕是幼武尊也長人次稱曰僕是一事
主神也遂與盤于遊田馳逐一鹿相辭發箭並轡馳騁言
詞恭恪有若蓬仙於是日晚田罷神侍送天
皇至來目水是時百姓咸言有德天皇也

又天皇婚丸邇之佐都紀臣之
女袁杼比賣幸行于春日之時
媛女逢道即見幸行而逃隱岡

邊キ故カレ作ミウタヨミシタヘル御歌ソノ其御歌ミウタ曰タ袁ラ登ト賣メ

能ノ伊イ加カ久ク流ル袁ヲ加カ袁ヲ加カ那ナ須ス岐キ

母モ伊イ本ホ知チ母モ賀ガ母モ須ス岐キ婆バ奴ヌ流ル

母モ能ノ故カレ號ソノ其岡ヲカヲ謂カナスキヲカトゾ金ナツケル鉏ツケル岡也

丸迹は姓をり止小出傳廿二の佐都紀臣を名なり
名義五月か臣以尸をり
袁杼比賣名義未考得史を師

小戸小て地名をくむや云はれ假字の例門此比
戸の濁みは度を用ひて杼を用ひはれいかに此
賣此事下小も見ゆ書紀小春日大娘皇女を主奉は
若く々父名女名共子傳の異なるて同人ありむか
此袁杼比賣小下小見えはゆま嫁小ややおさき
をかの童女君も本
采女なりいやあり
春日小出傳廿一の丸迹臣の
本居以丸迹を係を此地の事傳廿三の春日小幸行や
云以古春日以廣き名小て丸迹を春日の内をありさ
皇故下小春日之袁杼比賣あり
媛女逢道以袁登
賣能道尔逢流也訓法此媛女以誰やふし袁杼比
非交
岡邊ハ袁加備也訓法万葉五十七小乎加肥
尔波宇具比須奈久母十七十八小乎加備可良秋風吹

を非びして母能^モやけ即^チ上^ニ云^ハ依^ル金^ノ鉏^ヲ又^チ鳥^ヲ指^シて云
小^ノも^ハつ^クむ^ハ書^ノ紀^ニ應^ジ神^ノ卷^ノ大^ノ御^ノ哥^ノ小^ノ吉^ノ備^ノ那^ノ流^ノ伊^ノ慕^ノ塙^ノ
阿^ノ比^ノ流^ノ菟^ノ流^ノ莫^ノ能^ノあ^レも^ハ同^ノ格^カ此^ノ外^ニ母^ノ能^ノ表^シ云^ハ母^ノ
能^ノの^ミ云^ハ依^ル例^ニ猶^モ若^ク櫻^ノ宮^ノ段^ノ大^ノ御^ノ哥^ノ小^ノ多^ノ都^ノ基^ノ母^ノ
母^ノ知^リ互^ニ許^ス麻^ノ志^ノ母^ノ能^ノや^ハ何^レ依^ル処^ニ小^ノ出^セり^ト傳^ハ北^ノ八^ノの^波奴^ノ
云^ハ言^ハは^シ万^ノ葉^ノ二^ノ十^ノ丁^ノ小^ノ奥^ノ津^ノ加^ノ伊^ノ痛^ノ勿^ノ波^ノ祢^ノ曾^ノ边^ノ津^ノ加^ノ
伊^ノ痛^ノ勿^ノ波^ノ祢^ノ曾^ノあ^リ○一^ノ首^ノの^意以^テ此^ノ媛^ノ女^ヲと^よく^見
む^ハ所^ノ思^ハせ^テ依^ル岡^ノの^彼方^ニ隠^シて^見え^{ざる}ま^とく^も
を^く所^ノ念^ヲ看^テ金^ノ鉏^ヲを^多く^五百^ノ箇^ヲを^得ず^かし^此岡^ノ
を^土と^鉏き^起し^撥や^りて^崩し^てむ^物を^然せば^隠を

あ^ハ媛^ノ女^ノの^形貌^ノの^見ゆ^依き^あり^ます○金^ノ鉏^ノ岡^ノを^金字^ト
福^ノ寺^ノ本^ノ延^ノ佳^ノ本^ノ小^ノ依^ノり^今を^真此^ノ岡^ノ金^ノ鉏^ノ小^ノ由^ノ縁^ノ以^テ無^ケれ^ル
云^ハ意^ヲを^以て^か之^ハ名^ヲけ^しる^形り^而て^此地^ノ長^ノ谷^ノより
春^ノ日^ノ了^レ傳^ノの^間小^ノ在^ル法^ノ其^ノ処^ノ詳^カを^書紀^ニ崇^ノ神^ノ卷^ノ小
和^ノ珥^ノ武^ノ録^ノ坂^ノ云^ハ見^エえ^しる^云は^同き^由の^由を^録す^云
同^ノ地^ノを^依る^小お^不え^契沖^ノが^金字^と全^ノ作^ル依^ル本^ノ
小^ノ依^テ夕^ケス^キの^訓を^崇神^ノ紀^ヲを^引て^若今^ノ全^ノ作^ル依^ル本^ノ
や^ハ云^ハる^全を^夕ケ^スの^訓を^崇神^ノ紀^ヲを^引て^若今^ノ全^ノ作^ル依^ル本^ノ
全^ノ鉏^ノ丘^ノ在^ル添^上郡^ノ標^本村^ノ云^ハて^崇神^ノ紀^ヲを^引て^若今^ノ全^ノ作^ル依^ル本^ノ
哥^ノを^引て^那加^ノ須^岐母^ノ云^ハり^書紀^ノの^假字^ト
武^ノ字^ヲカ^カる^訓を^崇神^ノ紀^ヲを^引て^若今^ノ全^ノ作^ル依^ル本^ノ
は^さり^{なり}その^字那^ノを^加の^假字^ト
や^せ依^もい^みぎ^き強^事を^依る^を

又マタ天皇坐長谷之百枝槻下ハツセノモ、エツキノモトニマシクテトヨノ爲アカリキコシメストキニ豐樂之時イセノクニノ伊勢國之三重ヘノウネベ妹指オホミ舉大御盞以獻爾其百枝槻葉サカヅキラサ、ゲテタテマツリキコ、ニソノモ、エツキノハ落オチテ浮於大御盞其妹不知落葉オホミサカヅキニウカベリキソノウネオチバノミサカヅキニ浮於盞猶獻大御酒ウカベルラシラステナホオホミキタテマツリケルニスメラミコトソノミサカヅ天皇看行

其浮盞之葉打伏其妹以刀刺キニウカベルハラミソナハシテソノウネベヲウチフセミハカシラソノ充其頸將斬之時其妹白天皇クビニサシアテ、キリタハムトスルトキニソノウネベスメラミコトニマラシ曰ケラク莫殺吾身有應白事即歌曰アカミヲナコロシタヒソマラスベキコトアリトマラシテスナチウタヒケラク麻岐牟久能比志呂乃美夜波マキムクノヒシロノミヤハ阿佐比能比傳流美夜由布比アサヒノヒデルミヤユフヒ

能^ノ比^ヒ賀^ガ氣^ケ流^ル美^ミ夜^ヤ多^タ氣^ケ能^ノ泥^ネ能^ノ
泥^ネ陀^ダ流^ル美^ミ夜^ヤ許^コ能^ノ泥^ネ能^ノ泥^ネ婆^バ布^フ
美^ミ夜^ヤ夜^ヤ本^ホ爾^ニ余^ヨ志^シ伊^イ岐^キ豆^ヅ岐^キ能^ノ
美^ミ夜^ヤ麻^マ紀^キ佐^サ久^ク比^ヒ能^ノ美^ミ加^カ度^ド爾^ニ
比^ヒ那^ナ閑^ヘ夜^ヤ爾^ニ淤^オ斐^ヒ陀^ダ豆^テ流^ル毛^モ毛^ハ

陀^ダ流^ル都^ツ紀^キ賀^ガ延^エ波^ハ本^ホ都^ツ延^エ波^ハ阿^ア
米^メ袁^ヲ淤^オ幣^ヘ理^リ那^ナ加^カ都^ツ延^エ波^ハ阿^ア豆^ヅ
麻^マ袁^ヲ淤^オ幣^ヘ理^リ志^シ豆^ヅ延^エ波^ハ比^ヒ那^ナ袁^ヲ
淤^オ幣^ヘ理^リ本^ホ都^ツ延^エ能^ノ延^エ能^ノ宇^ウ良^ラ婆^バ
波^ハ那^ナ加^カ都^ツ延^エ爾^ニ淤^オ知^チ布^フ良^ラ婆^バ閑^ヘ

那ナ加カ都ツ延エ能ノ延エ能ノ宇ウ良ラ婆バ波ハ斯シ
毛モ都ツ延エ爾ニ淤オ知チ布フ良ラ婆バ閑ヘ斯シ豆ヅ
延エ能ノ延エ能ノ宇ウ良ラ婆バ波ハ阿ア理リ岐ギ奴ヌ
能ノ美ミ幣ヘ能ノ古コ賀ガ佐サ佐ハ賀ガ世セ流ル美ミ
豆ヅ多タ麻マ宇ウ岐キ爾ニ宇ウ岐キ志シ阿ア夫フ良ラ

淤オ知チ那ナ豆ヅ佐サ比ヒ美ミ那ナ許コ袁ラ呂ロ許コ
袁ラ呂ロ爾ニ許コ斯シ母モ阿ア夜ヤ爾ニ加カ志シ古コ
志シ多タ加カ比ヒ加カ流ル比ヒ能ノ美ミ古コ許コ登ト
能ノ加カ多タ理リ碁ゴ登ト母モ許コ袁ラ婆バ故ケ獻ケン
此コノ歌カ者シ赦シ其ノ罪ツミ也ニキ

出て其処小云里傳北ハの此郡小采女郷也ありざり
妹は宇祢辨覺訓傳し右の郷名を和名抄小宇祢倍覺
注せり六帖小平假字小七改傳がれ字ぬ倍覺あり其
外古き物うね倍覺多く書り辨江部の意なり女の意
小を非交を賣や常小唱傳は部を音便不然云なり公卿
令の采女司小采部六人女部別小男小て采女
のらや小を非交られは采女部云倍覺と畧き多傳
之分注小官人三人采部六人采女二十人女部八人
別を傳らやを知傳し續紀北六小采女司采部采女臣
家足や云人見ゆさて又令集解籙中抄拾芥抄を抄小
齋宮諸司の中小采部司やあ傳を抄字は此記小を
采女司なり思ひ了が多傳うと矣抄字は此記小を
みふ妹覺のみ作里是古の書さばふ傳し妹字玉篇
小妹女也

此あり後漢書皇后紀論小又置美人宮人采女三等並
無爵秩歲時賞賜充給而已漢法常因八月笄民道中大
夫与掖庭丞及相工於洛陽鄉中閱視良家童女年十三
以上二十以下姿色端麗合法相者載還後宮擇視可否
乃用登御所以明慎聘納詳求淑慝也云註小采擇也
因采擇而立名也云里佛ふみ大智度論小昔有須陀須
摩王云く晨朝乘車將諸妹女入園游戲晉譯華嚴經小
王得道時於其正殿妹女圍繞七宝自至云云云云
らの妹女も采女のこや聞え多り然まバ此方の古
書小妹女書傳もふりやころあ傳らやをり妹字はこ
や采女の二字を一つ万葉四小と駿河妹女也見え政
合せも伝意を傳し万葉四小と駿河妹女也見え政
事要畧五小昌泰三年注進興福寺縁起曰公主命婦妹
女妹を妹を寫誤をやり然傳尔令又書紀をや小采
女書多傳りして後世小は凡て然のみ書らや
や傳れ里後小は妹を書らやをば知らずして延佳が
此記の妹を小みね采女小改定於傳を古小

信シがカあリてハ妹ノ主ヤ御饌ノ事ハ仕奉一事は次ハ云レ伝ハ
書紀履中卷小令レ小墾田米女賜酒于玉田宿祢雄畧
令レ水司采女日媛奉酒進奉也ハ後宮職員
領以上姉妹及子女形容端正者從丁一人以一百戸宛
采女一人粮庸布庸米皆准次丁後宮職員令レ凡諸氏
氏別云レ其貢采女者郡少領以上姉妹及女形容端正
者皆申中務省奏聞者不在貢兵衛之例也
也後の定事ハそのハ上代ハ必シ如此ク也
其ハ大方ハかくぞありけむ御書紀此
是百濟より采女を貢さてハ妹ハ其姓を呼次其國其郷
を以テ其知コの妹ハ呼例なり古書皆然也後ハ傳同じ源氏物語ハ肥後采女

を以テ其知コの妹ハ呼例なり古書皆然也後ハ傳同じ源氏物語ハ肥後采女
ありさてハ妹ノ負ハ物ハ見え矣後宮職員令レ宮人也
ありて義解ハ婦人仕官者之總号也也ハ内ハ妹
をハ傳し負ハ定まりを無加りけむ同令水司下小
采女六人膳司下小采女六十人也内ハ總テの數
小ハ非じ采女司式ハ凡采女四十七人賜近宮城地
是ハ總テの員也も聞え矣續紀二小大室二年令筑紫
衛貢之但陸奥國勿貢之也國ハ遠き故ハ此時ま
國筑波米女壬生宿祢小家主上野國佐位采女上野佐
位朝臣老刀自存也本國の國造也也也宝龜二年の
起小因幡國高草采女國造淨成女也見え多傳也常
をハ傳し類聚國史ハ大同二年五月停諸

國貢采女ヤウ十一月停諸國貢采女ヲ但云若叙五位
已上ニ及補雜色者即除采女名弘仁四年正月制令
伊勢國壹志郡尾張國愛智郡常陸國信太郡但馬國養
夫郡貢郡司子妹年十六已上ニ二十已下容貌端正堪為
采女者各一人ヲ後世ノ台記久安六年女御
入内別記祿法ノ御膳宿采女世二人云云ハ陪膳
此ノ可キ然事也近代漸令零落無極尤可有沙汰事也
云職負令小采女司正一人掌檢校采女等事佑一人令
史一人采部六人使部十二人直丁一人也○指サ奉
大御蓋師此ノ蓋ト宇伎訓あり哥小ノ其
候亦佐加豆伎上卷八千矛神段小也其后取大御
酒杯立依指奉而云傳十一ノ中卷倭建命段小也其
美夜受比賣捧大御酒蓋以献見入續後紀五遣唐使

小餞を賜ふ処小大使常嗣朝臣避座而進喚采女二声
采女擊御盃采授陪膳采女常嗣朝臣跪唱平天皇為之
奉訖行酒人進賜常嗣朝臣云云西宮記小陪膳事節會
陪膳采女奉仕多延長二正廿五甲自院被奉子日宴
於大裏天皇御南殿中務卿親王避座立喚采女采女稱
唯進御酒陪膳采女擊盃欲献爰親王進跪唱平天皇即
執盃御飲畢稱精○不知落葉浮於盃之水面を俯し目
より高く撃つ献杯故小見えは依俗言云意なり古ハ盃
む俗言云意なり古ハ盃
酒を盛了献見入○看行の事中卷倭建命

段小委云傳北七の五十三葉 ○打伏其妹云くは慎まふおる

そ加ふして急生依を大く怒坐依なり ○應白事白字 舊印

本又一本今ハ真福寺本ハよき ○麻岐牟久能

比志呂乃美夜波は纏向之日代宮者なり此宮の事

中 卷小云傳二十六抑此は景行天皇此大宮の名那依

を今此御世お加く哥守依るはひり加しきを

谷の槻の下に宴をれ處其木をこそうあお依け生又

大宮は長谷朝倉宮のこををこそ申は依け生古の御

世此大宮を云るこ心得に故若く是此段の故事は

九て景行天皇の御代の事をりけむがまがひて此御

世の事なりて傳はりしふ若は此哥志をえ事ひる

をお守る云子傳を加之景行天皇の御代小大宮小

名高く美ホメき槻の大樹此有しを賛ありし哥小て名高

く傳は依依を取て今ホメの長谷の百枝槻を其小准牙

て其次を新小作を継てうあ守依るや阿むむ又は彼

日代宮の槻木名高く美ホメきああし尔語傳牙あ依大木

を依を以て今の百枝槻を即其小云あして首より新

小作を依るもあ依依契沖西國の熊襲云く准牙奉

膳夫御盃を忘るあ依依ぬ云依はるし又彼御時

こやの今孟小槻葉の落て浮びしを知らさるしを似

あ依事な依る依て却るあ依依由小よみりさむあ

あ依るも依るも阿佐比能比傳流美夜を朝日之日

考所依処考合以依し傳十五の○由布比能は夕日之
なり○比賀氣流美夜は日陰依宮なり賀氣流は日影
の刺多依の刺多あり陰小を依を中昔の哥小加宜
呂布やよみ今世の言小加宜流や云是なり然依尔賀
を濁里氣を清依を古の音便ふて此例此彼やあらず上
卷豊久士比泥別の処傳五の小云依が如し契冲は日
云龍田風神祭祝詞小外日乃日隱處や何まや
隱依を賀氣流や云依を何まや
小非依又或人以日影心な○多氣能泥能は竹之根
之なり○泥陀流美夜を根足宮なり○許能泥能は木
之根之なり○泥婆布美夜は根蔓延宮なり万葉三十五

二小磯上丹根蔓室木さて此四句は竹木の根小て地
の堅きよし尔壽なるはと竹の根此如くよろ満
足ひ木根根の如く長久し加依依をよし尔壽多依
加○夜本尔余志は八百土小て余志多助辞なり冠辞
考小見ゆ契冲余志を言せりそをく土は数を以て
云依を物小非依を八百土云云必しを数小を非を
如此さまふ云も常を小御垣を築くある埴土をよ
き不火の大さ尔堅多依を次こ許多並依積重
て築く故を依依し又御垣のみならず又宮の形依ての
地をも然して堅む依尔を何依依し○伊岐豆岐能美

夜は杵築の宮ふて伊の發語なり。杵築は多杵して搗
堅免て築を云出雲風土記出雲郡杵築郷の処小所造
天下大神之宮將奉而諸皇神等參集宮處杵築故云寸
付とあるが如しさて朝日之宮云ふり此は傳を日代
宮を贊多條なり。○麻紀佐久の真木折ふて檜の枕詞
あり冠辞考小見ゆ。○比能美加度は檜之御門なり。師
多加比加流比能美夜比登とも万葉一小日之御門と
もあゆ依る此をも檜を日よ轉して云かけとるあ
る日之御門あり云はれぬも若其意をう傳ふる
る高光云そ云傳けは真木さく堂のい加傳り云む
るも此檜を日之御門事万葉一な依日之御門は日
例の借字なりともあゆ傳く又五卷小高光日大御朝
庭也もいし其をや後の哥をれ傳檜を日の意よ
取加牙てよあり云七云傳けは傳古を日之御門云

るやを無かりしや母云傳し然も此は次か依大御
哥小高光日之宮やもあゆる日之御門云傳
さるや論をいしは傳古より檜之御門也日之御門
也も云て其を各異言にして一言を非りしをれ傳
真木折や云依るも檜之御門。○尔比那附夜尔師の
門ふて日之義はふる形なり。○契冲が上の亦を上句
新嘗屋ふありや云はる依宜し。の終よ歸て引並屋り
也云依るは天皇の新嘗所聞看殿あり上卷小聞看大
嘗之殿也あ依ふ同じ新嘗の事彼処小委云里傳八の
○淤比陀互流を生立有あり。○毛く陀流は百足なり。
此を次句の枝くの多く茂里足牙依を云應神天皇の
枝牙係り。大御哥小毛く知陀流夜尔波也もあ依処考合次傳し
傳世二の葉。○都紀賀延波を槻之枝者形り。の枝を云て

其枝者云々と次小上中 ○本都延波は秀枝者ふて上
下の枝を分て云あり ○阿米表淤幣理は天を覆有なり 契沖が淤幣
るハ非なり延佳も師も覆りりとせしむるる假字がうひを知
し延佳が表を覆の淤と心得るるる假字がうひを知
表を辞ひかろなり 淤本幣理云信を本幣を幣
切免て云里さて天を覆多を御殿を天之御蔭日之
御蔭なり云如く天の覆ひなり依意なり 大虚空小
の袖もが ○那加都延波中枝者なり ○阿豆麻表淤
幣理は吾妻を覆りなり東方國を吾妻云事の由
中卷倭建命段小見ゆ 傳世七の さら鄙云小東國
もこも依をか別小東を云依も只上枝中枝下枝

○志豆延波下枝者なり 次小を斯毛都上枝中枝下
枝みふ上小出 ○比那表淤幣理を鄙を覆りなり都
の外を總て何処ふるも比那表云里書紀神代の哥小
○古事記傳四十二 ○三十三

あるはか加依鄙女之阿... 比那云言の本比意舊き
也も日の下や毎云生き何... 説小比無云師を甲厨中
をさ可云依尔都... 比那云言の本比意舊き
刺覆守依... 比那云言の本比意舊き
をのみ挙て近を都の内は... 比那云言の本比意舊き
東海道を除きて比那小非... 比那云言の本比意舊き
又阿米や云を畿内小准... 比那云言の本比意舊き
て京を挙ざ依... 比那云言の本比意舊き
宇良婆波多枝之末葉者... 比那云言の本比意舊き

云常の... 比那云言の本比意舊き
古語ありや云依を非... 比那云言の本比意舊き
了活かし多依言あり... 比那云言の本比意舊き
上瀬尔生玉藻者下瀬尔... 比那云言の本比意舊き
の此句小依て... 比那云言の本比意舊き
万葉小觸と書了... 比那云言の本比意舊き
○斯毛都延尔以下枝... 比那云言の本比意舊き
小毛を衍文を依... 比那云言の本比意舊き
わらしはは豆や都... 比那云言の本比意舊き
言を二あび云や... 比那云言の本比意舊き
上卷八千牙神御哥... 比那云言の本比意舊き
云く阿理登岐許志... 比那云言の本比意舊き
を三重の枕詞小... 比那云言の本比意舊き

云^マ。○美幣能古賀ハ、三重之子之小て、妹み於か^カの
こ^カなり。三重と於^カく意ハ表と裏と中重と三重^ウ
乃河原とも。○佐賀世流ハ、賀字多^カくの本^カ加^カと作^カ
小依指^サ有^セなり。佐賀宜^サ流^ルと云^セ伝^スきを如^カ此^カ云^ハは立^ルる本^カ
格^カなり。○美豆多^ミ麻^マ宇^ウ岐^キ尔^ニを^シみ^カ如^カくし^カ玉^{タマ}孟^{マウ}小^コなり。
美豆^ミ又^マ玉^{タマ}孟^{マウ}と^シ玉^{タマ}の孟^{マウ}玉^{タマ}係^ケる何^ニも^カ玉^{タマ}孟^{マウ}を^シは^カ来^ルて^カ云^ハ
書紀景行卷小十八年八月到的邑而進食是日膳夫^カ
等遺^ト蓋^カ故^コ時^ト人^ト号^ス其^ノ忘^ル蓋^カ處^ニ曰^ク浮羽^{ウキハト}今^ノ謂^フ的^ニ者^ト訛^ル也^{ナリ}昔^ノ筑^ク
紫俗号^シ蓋^カ曰^ク浮羽^{ウキハト}筑後風土記小昔景行天皇巡國既畢^カ
還都之時膳司在此村息御酒蓋云々天皇勅曰惜乎朕^カ

之^ガ酒^{ウキ}蓋^カ俗^カ語^カ云^フ酒^カ因^リ曰^ク宇^ウ枳^キ波^ハ夜^ヤ郡^ノ後^ノ人^ト誤^リ号^ス生^シ葉^{エフ}郡^ト息^ス
之^ガ忘^ルを誤^リし^カ蓋^カと^シ宇^ウ枳^キ波^ハ夜^ヤ郡^ノ後^ノ人^ト誤^リ号^ス生^シ葉^{エフ}郡^ト息^ス
但^シ他^ノ國^ノ不^レ了^スを云^フ如^ク外^ノ不^レ見^ルえ^カ然^ルに^カ筑^ク紫^シ言^ハ小^カ
景行天皇の彼故事を思ひ^カ云^フ契^ケ冲^{ウキ}が^カ云^フ如^ク。○宇^ウ岐^キ志^シ
阿夫良^ア以^イ浮^ウ脂^シ神代^ノ初^メ小^カ國^ノ稚^シ如^ク浮^ウ脂^シ而^シ多^ク陀^タ
用幣^ヒ琉^ル之^ノ時^ト也^{ナリ}浮^ウ脂^シの^ノ如^クな^リ物^トを^シや^カ加^フ脂^シ之^ノ
云^フ云^フ云^フ云^フ其^ノ由^リ以^テ次^ニ云^フ傳^ハし^カ句^ヲを^シ毎^ニ云^フ落^ルを^シ
云^フ小^カ今^ノ御^ノ孟^{マウ}小^カ落^ル葉^ノの^ノ浮^ウ脂^シを^シ加^フの^ノ神^ノ代^ノ初^メ不^レ浮^ルし^カ
中^ノが^カ多^ク傳^ハし^カ契^ケ冲^{ウキ}此^ノ意^ヲを^シ知^ルら^ズし^カ酒^ノの^ノ濃^クし^カ
和^ノ名^ノ抄^シ小^カ酒^ノ膏^{カウ}佐^サ賀^カ阿^ア布^フ良^ラ見^ルえ^カ江^カ家^ノ次^ノ第^ニ小^カ大^カ臣^ノ家^ノ
大^カ饗^カ條^ノ小^カ公^ノ卿^ノ寺^ノ參^シ集^ス於^テ辨^シ少^ク納^ル言^ハ座^ニ小^カ飲^ム謂^フ之^ヲ待^テ油^カ云^ハ

○古事記傳四十二

○三十五

云。中。関。白。御。時。於。細。殿。有。待。膏。云。く。な。り。云。く。と。と。あ。ま。り。云。こ。ま。り。を。此。小。は。由。來。さ。ま。り。思。ひ。ま。が。あ。ら。う。と。勿。邊。但。し。酒。小。待。油。と。云。く。の。何。る。を。と。此。○。淤。知。の。哥。より。出。し。る。事。小。や。何。ら。む。そ。は。あ。ら。う。と。○。淤。知。那。豆。佐。比。比。以。淤。知。以。落。多。り。那。豆。佐。比。比。を。浮。多。を。云。九。了。此。言。は。或。を。水。小。浮。多。を。も。云。或。を。底。小。沈。む。を。も。云。或。を。渡。海。を。も。云。て。何。き。も。水。小。著。ら。ず。小。云。り。万。葉。を。見。ま。り。玉。勝。間。小。委。く。云。り。此。言。昔。より。物。知。人。み。を。解。誤。ま。り。さ。て。此。以。御。盃。の。酒。小。浮。傳。了。よ。て。水。小。非。多。り。を。酒。も。水。の。類。を。れ。其。中。小。浮。多。を。云。了。例。を。万。葉。三。十。四。は。違。り。は。ら。や。か。し。八。小。云。く。黒。髮。者。吉。野。川。奥。名。豆。颯。四。十。六。小。鳥。自。物。魚。下。小。云。く。黒。髮。者。吉。野。川。奥。名。豆。颯。四。十。六。小。鳥。自。物。魚。津。衣。比。去。者。水。鳥。の。水。小。浮。て。十。二。丁。十。二。小。尔。保。鳥。之。奈。津。柴。比。來。乎。を。や。形。不。知。理。了。此。可。傳。三。句。の。意。以。彼。

神代の初。空。中。小。浮。脂。の。今。此。玉。蓋。小。落。浮。び。了。是。加。の。槻。北。落。葉。を。祝。て。如。此。云。傳。せ。る。形。り。語。の。め。が。さ。了。知。傳。し。此。處。上。く。せ。○。美。那。許。袁。呂。句。許。袁。呂。尔。を。水。凝。り。小。な。り。上。の。浮。脂。比。相。照。し。見。傳。し。上。卷。小。於。是。天。神。諸。命。以。詔。伊。那。那。岐。命。伊。那。那。美。命。二。柱。神。修。理。固。成。是。多。陀。用。幣。流。之。國。賜。天。沼。矛。而。言。依。賜。也。故。二。柱。神。立。天。浮。橋。而。指。下。其。沼。矛。以。畫。者。塩。許。袁。呂。許。袁。呂。途。畫。鳴。而。云。く。傳。四。の。此。は。此。國。土。の。成。始。ま。り。了。事。ふ。て。い。や。も。多。多。く。好。き。故。事。を。傳。故。小。今。落。葉。の。御。蓋。小。浮。傳。了。を。是。小。よ。る。可。て。壽。奉。了。形。り。美。那。也。を。本。

能多氣知爾古陀加流伊知能
都加佐爾比那閑夜爾淤斐陀
互流波毘呂由都麻都婆岐曾
賀波能比呂理伊麻志曾能波
那能互理伊麻須多加比加流

比能美古爾登余美岐多互麻
都良勢許登能加多理碁登母
許袁婆即天皇歌曰毛毛志紀
能淤富美夜比登波宇豆良登
理比禮登理加氣互麻那婆志

良^ラ袁^ヲ由^ユ岐^キ阿^ア閑^ヘ爾^ニ波^ハ須^ス受^ズ米^メ宇^ウ
 受^ズ須^ス麻^マ理^リ韋^ヱ豆^ト祁^チ布^フ母^モ加^カ母^モ佐^サ
 加^カ美^ミ豆^ヅ久^ク良^ラ斯^シ多^タ加^カ比^ヒ加^カ流^ル比^ヒ
 能^ノ美^ミ夜^ヤ比^ヒ登^ト許^コ登^ト能^ノ加^カ多^タ理^リ碁^ゴ
 登^ト母^モ許^コ袁^ヲ婆^バ此^コ三^ミ歌^{ウタ}者^ハ天^{アマ}語^{コト}歌^{ウタ}

也^{ナリ}故^{カレ}於^コ此^ノ豐^{アカ}樂^リ譽^ニ其^ソ三^ニ重^ヘ姝^{ノウ}而^ネ
 給^モ多^サ祿^ハ也^ニタマヒキ

大后を若日下王あり。○夜麻登能は倭之なり。○許能
 多氣知^{タクケチ}尔^ニは此高市小なり。師云、こを高市郡を云ふは
 非^ヒ交^コ京^{キョウ}を不^フ求^{モト}て云^イ形^カり^シ也^{ナリ}云^イ多^タき^キ九^クて^テ市^シ中^{チュウ}ハ^ハ四^シ方^{ホウ}よ
 里^リ人^ニの集^ツる^ル依^ヨ處^トを云^イな^レれ^ド必^{カナラ}し^シも^モ物^{モノ}賣^ウ者^ノ此^コ集^ツる^ル
 京^{キョウ}を^シも^モ不^フ求^{モト}て^テ高^{カウ}市^シ也^{ナリ}云^イ多^タき^キあり^シ神^{カミ}代^ト小^コ高^{カウ}天^{テン}原^{ハラ}小^コて
 毛^{モウ}會^{カイ}八^{ハチ}十^{ジュウ}萬^{マン}神^{カミ}於^ニ天^{アメ}高^{カウ}市^シ也^{ナリ}あり^シて^テ人^{ヒト}の集^ツる^ル依^ヨ處^トを云^イ

新嘗所聞食以殿を依を上を依哥也上の詞を變てか
くはよみ賜了依形るはし高市の中よて小高く最高
は形りよ中ひ最高き地小多非也也○淤斐陀互流こ
も大宮を必如此云修きものなり○
賀波能は其之棄之なり此より四句も彼高津宮段の
御哥小出但彼は斯賀波那能互理伊麻斯芝賀波能比
呂理伊麻須波也あり傳卅六の○多加比加流比能美
古尔上小出○登余美岐句多互麻都良勢上卷須勢理
毘賣命の御哥小見ゆ傳十一のさて此は上小比能美
古尔也あれど献也人小仰せ賜多形り○毛志紀

能大宮の枕詞して冠辞考小見ゆ○淤富美夜比登
波比大宮人者小て大宮小仕奉依人あちなり宮人也
此を清音なり後世小○宇豆良登理を延佳本小字
濁依を古小さが可り○
例のなるさ加ら改免あ依ひがらなり記中不
を可字を假字小用ひる例なり諸本み字やり
鶉鳥をり常小は然云ぬ名小も某鳥某魚某の木を
ぞ添て鴨鳥を例多し和名抄小鶉和名宇都
良或説小宇豆良を韓語なり今朝鮮小ても色知らや
て延佳本小此を可豆良やせるを用いて師も蔓や
て登理を取掛の意なりや云さるを誤なりさば加
了假字の事を重き物小云さるを似次此記の假
字加ひれ例も思はさざりし身い加ふそや且蔓
小了賜了依例小を連了依をや○比礼登理加氣互を

領中取掛而あり。領中云物の本此由多上卷蛇比礼
之阿依延小云依加如し。傳十のさて是を振るや書
紀欽明卷此哥に柯羅俱尔能基能陪你陀致底於譜磨
故幡比例甫囉須母云く万葉五二十小麻都良我多佐
欲比賣能故何比例布利斯云くを也見え古を九て女
是此を掛ありや於不くて書紀崇神卷小埴安彦之
妻吾田媛取倭香山土累領中頭而云く万葉十三八小
濱菜摘海部處女等纓有領中文光蟹云くを也見え多
里大神宮儀式帳小生絹御比礼八端須蘇長各五外宮
儀式帳小毛生絶比礼四具長各二尺五寸廣随幅さて色九て

白きか万葉哥小榜領中乃白也。細比礼乃驚也。每初
於けよ米り和名抄小領中婦人項上飴也。日本紀私記
云比礼以て書紀天武卷小十一年三月詔曰云く亦膳
夫采女等之手纏肩中並莫服續紀三小慶雲二年四月
先是諸國采女肩中田依令停之至是復舊焉。縫殿式年
中御服中宮料小領中四條料紗三丈六尺別九比山抄
内宴條小陪膳女藏人比礼料羅事舊年仰織部司人別
一丈三尺を也見えあり。又式の中小帔也。あ依物也。比
らむよ尋ぬ依し。漢籍也。毎云依枕冊子も采女
帔也。比礼も非次思紛多依か。交枕冊子も采女
の装束小比礼を掛多依ら見えあり。大殿祭祝詞小

此礼懸伴緒云々大被詞ふも如此ありさて此上小鶉
鳥々詔事意を契沖が鶉のふれ肩より胸了傳河依を
領中掛あれさす小諭可も詔可り云依が如し可
此鳥項より胸かけて白を斑あり領(一) 麻那婆志良を
中掛あ依さま其あぞ似ありけむ
鶉鶉の一名云里和名抄小名此名は見え原和名ホ
布理日本紀私記曰止豆木字鏡小鴨弥左古又万奈柱
手之附止里のみにあり
了あ鶉加利又万奈柱あ鶉豆々万奈柱を河さ
皆詳あ文(一) 表由岐阿附を尾行令合なり阿附は阿
波世の切里あ依あて阿比云々異河里活用此
集り添をそ牙云は令添あり集り添をそ加依云を令

令浮なりかて此行合を彼方此方より對ひて行合
此類多しかて此行合を彼方此方より對ひて行合
あそ非次相並び連を依と云て鶉の行合の間を云
行合や同じ彼をばあ云鳥は群居依尾の
多く並傳依を以て譬可あ依あて領中掛あ依宮女等
のある多並座あ依裳あもの後方小長く引さるが
相並び連なりあ依狀を詔可依形り又上を女此は男
依狀かやも思可然あ非じ其故を上此礼登理
加氣の処あ互あて此由岐阿附の下小を互あ云
辞なるを上より一連あて女男を並傳云依さま
小非次且男女相混り連あて女男を並傳云依さま
此をあ女官あちの狀を詔可依小て男官人の狀あ
て行は宮女の裳は依を長く引ても然りあかあ
くあ依あるあ諭可あまか云依をいみあかあ

あやなり。是を次の御向小居てや。ゆふよく行、
可き由をし。その字牙尾を引てよく行、うやを尾行敢
やをい加傳り云む。ゆふ拙き。○尔波須受米を庭雀を
語は、ゆふ伝くも。かむ。○雀をよく庭雀小降て群居る物。此も次の御向小居
る。故小庭雀や。詔をる。○宇受須麻理韋互を群統
ぬる。うや上二の例に如し。○宇受須麻理韋互を群統
牛居而なり。宇受は群居る上卷小宇士多加礼や。ゆふ
ウ士や通ひて。親しと通音なり。同じ宇士の事。彼処小
云ゆと考牙て知傳し。傳六の彼蛆も。多く群がゆ意の
名をゆ傳し。微小虫を俗小宇受虫や。須麻理は書紀小
ハ坂瓊之五百箇御統御統此云美須磨屨と。貫連ぬ集
詠よせ。ゆふ百箇集や。よる。是なり。ゆふゆ同言小
白玉之五箇集や。よる。是なり。ゆふゆ同言小

多く會集牙ゆを云。ゆふ此御向を庭雀の如く多
く群集居てや。詔牙ゆなり。契沖須や久や同韻をゆ傳
豆の誤ふて。うやゆと生ありや。祝詞の集侍を引て
同言なり。ゆふ云。ゆふゆ皆ひか。とや。ゆふゆ引て
譬ふ。庭雀を似ゆか。はしから。又婦人。此ゆ傳くま
る居む。ゆふゆ。○祁布母加母を契沖今日歌なり。ゆふ
小をあら。○此詞古哥小ゆ例皆然ふて。二の母を共小助辞を
る。○佐加美豆久良斯冬万葉十八十一小多知婆奈能
之多泥流尔波尔等能多豆天佐可弥豆伎伊麻須和我
於保伎美可母又丁左加美都伎安蘇比奈具礼止云々
十九丁九小酒見附采流今日之安夜尔貴左をゆゆゆ

至て宴樂のくや形り然云言の意を師云万葉廿小美
豆久白玉や以依美豆久や同くて沈醉淵醉を云か
如し云云きも今思ふ又万葉十八丁小海行者美都
久屍續紀天平廿一年のやあるを云も水小所漬ツカルくや
をきば酒小所漬ツカルしして云小や俗言小も酒を甚く
好みて去ばく飲者
を酒小漬ツカ又思希ふを神名帳小造酒司坐酒殿神二
居依や云ミ又思希ふを神名帳小造酒司坐酒殿神二
座酒弥豆男神酒弥豆女神姓氏録酒部公條小大鷦鷯
天皇御代從韓國參來人兄曾エソソ保利弟曾ホリ保利二人
天皇勅有何才白有造酒之才令造御酒於是賜麻呂号
酒看都子賜山鹿比咩号酒看都女因以酒看都為氏此文此

印本を誤字ゆ至今を以酒美豆也即酒のくや形
を古本小依ミなり今を以酒美豆也即酒のくや形
了然云意を榮水サカを依ミ傳しして其を佐氣サキののみ云也
水を省ハジ多依名形依傳し師云酒也云名を榮也云くや
なり是と飲をば心の榮也
あり加て酒宴依を佐加美豆久云云榮水飽小
了酒を飽了飲樂布よしとや抄くむ良斯を推度
依辞あり○比能美夜比登は日之宮人小即上の大
宮人なり天皇を日御子小坐くて萬を日神小ミなり
了を申依例あり大宮を也日宮や申依形り万葉一
日之御門五小高光日御朝廷ミカドを也もあはさて此宮人
を宮女等と指て詔ミコトノミコト依形り○此大御哥此処小入是

了。壽奉^{ホギ}と。譽賜^{ホノ}可^ホ。給^{モリ}多^{サハニタヒキ}禄也。若櫻宮段
 多^{モノ}多^{サハニタヒキ}禄給^{モリ}。祿の事彼^{ソコ}処^コ云^リ。傳^{モリ}世^セ八^{ハチ}の^ノさ^サ
 後^{ノチ}世^セ小^コ至^シ係^{ケル}。信^シ彼^カ伊^イ勢^セ國^{クニ}三^{サン}重^{ジュウ}郡^{クニ}小^コ采^{サイ}女^メ郷^{キョウ}也^{ナリ}云^フ。此^{コノ}
 係^{ケル}也^{ナリ}。全^{モト}此^{コノ}妹^{イモ}が^ガ此^{コノ}哥^カを^ヲよ^ミ。い^ハみ^じく^ク賞^メ美^メら^シ
 奉^リ。い^ハし^ク名^ナ高^カか^リし^シ故^{コト}を^ヲ係^{ケル}
 傳^フし^シ所^{トコロ}亦^モ多^シ也^{ナリ}。今^{イマ}世^セ亦^モ采^{サイ}女^メ
 村^{ムラ}也^{ナリ}云^フ。

是^{コノ}豐^{トヨ}樂^ノ之^ノ日^ヒ。亦^ニ春^{ハル}日^ノ之^ノ袁^{カスガ}杼^ノ比^{ラドヒ}
 賣^メ獻^ガ大^{オホ}御^ミ酒^{サケ}之^ノ時^{トキ}。天^{アメノ}皇^{ミコト}歌^{ウタ}曰^{ハク}。美^ミ
メガオホミキタテニツルトキニスメラミコトノウタヒタニヘル

那^ナ曾^ソ曾^ハ久^ク淤^オ美^ミ能^ノ袁^オ登^ト賣^メ本^ホ陀^ダ
 理^リ登^ト良^ラ須^ス母^モ本^ホ陀^ダ理^リ斗^ト理^リ加^カ多^タ
 久^ク斗^ト良^ラ勢^セ斯^シ多^タ賀^ガ多^タ久^ク夜^ヤ賀^ガ多^タ
 久^ク斗^ト良^ラ勢^セ本^ホ陀^ダ理^リ斗^ト良^ラ須^ス古^コ此^コ
 者^ハ宇^ウ岐^キ歌^{ウタ}也^{ナリ}。爾^{コノ}袁^ニ杼^ド比^ヒ賣^メ獻^メ歌^{ウタ}

其歌曰。夜須美斯志。和賀淤富
 岐美能阿佐斗爾波伊余理陀
 多志由布斗爾波伊余理陀多
 須和岐豆紀賀斯多能伊多爾
 母賀阿世袁此者志都歌也。

是豊樂以上の長谷の百枝槻下のなり。○袁村比賣上
 小出傳此卷これに採小やあまけむ其由を上。○美那
 曾久也。久清音水灌下。次御句の淤小係。依枕詞
 有り冠辞考小見。又其みふた。多れ條とも考合。次
 久也云々。少しいか。云々。依。中。小。ゆ。あ。や。と。曾。く
 依。く。や。を。も。曾。く。久。也。云。々。有。り。さ。は。は。此。を。常。小。水。小。浸。也
 よしなり。淤。や。於。く。之。魚。の。意。を。り。持。也。魚。を。宇。袁
 を。依。と。淤。や。云。々。上。の。曾。く。久。の。久。れ。韻。宇。お。て。長。く。引
 て。詠。牙。ば。久。宇。淤。や。を。依。其。宇。淤。は。袁。切。る。是。は。於。の
 於。か。く。魚。也。聞。ゆ。れ。あり。魚。を。宇。を。省。き。了。袁。云。は。常
 の。説。ゆ。ち。ら。あり。さて。此。淤。や。於。く。契。沖。を。仁。徳。紀。の。御。哥

るを今ハ延佳本契沖本ハ依まりさて取の假字也此
上ハの登を用ひ記中多クは登をれども又中卷明宮
段の哥ハ斗理也斗良年也秀樽取なり此より嬢子
を賢て誠免賜多御詞なり○加多久斗良勢は堅固く
取をり此加多久ハ書紀此御卷の哥ハ云く飲良枳
源尔柯拖俱都柯陪麻都羅武騰云くや何休柯拖俱也
同意ハ解はこや形と勤免勵む意なり○斯多賀多
久ハ諸本皆賀の下ハ今ハ加字あり今ハ下堅くなり
師ハ斯を上ハ句属次句の夜を此句属て誰堅くや
○夜賀多久斗良勢ハ上堅く取まる宇波を和切
まゆも夜行通はて夜中も云ゆふや
夜行通はて夜中も云ゆふや
夜行通はて夜中も云ゆふや

通多例屋屋根も上の意か又いやがう言や云も上か
上や云ふて九て弥も上や云意ハやあらむ又夜字を
て真堅くかは弥も上や云意ハやあらむ又夜字を
此ハ下堅くかは弥も上や云意ハやあらむ又夜字を
あ傍ハ師是了信三句を解て堅く取しを誰為小思
や云ま然れ也さてを御向の如かひ調あり且此を然ゆ
意をよみ賜多さて此下上を樽の下上方なり其形
長高けまば下や上や尔手を掛て取持傍き形也○本
陀理斗良須古古は子ハ表杼比賣を指て秀樽取ま
ゆ子も也詔ふ形也○一首の意ハ表杼比賣が大御蓋
小盛ゆ傍き御酒の樽と執持ゆ容儀の正ハ美麗

きを見そぬけ感て。賛称賜りあふて。罇の下上を堅
く取まぬ。詔多をいふく浄き心を以て。勤免をよく仕
奉る。勿懈。罇を取。不託て。凡て仕奉。依くゆを誠
免賜りあふり。さて然誠。賜多を。即賛賜多あり。萬の事
を賞むゆて。いふく善くせよ。此警。○宇岐歌をいかな
免。勸了次を常。あある。こゆを。○酒盞哥なり。云ま。於れ
依由の名。ふか。未思。得次師。酒盞哥なり。云ま。於れ
也。そを上を。依三重。妹の哥。こ。抱ゆ。云免。此御哥。ふを
由。ま。若くは。詠多。声の浮沈。を以て。号。と。あふて。浮哥
ふや。其。不。就て。思。あ。ふ。を。次。を。依。志。都。哥。を。沈。哥。か。ゆ。○
阿佐斗。尔波斗。字諸。本。不。計。不。真。福。寺。本。誤。ま。り。今。ハ。次

なる由。布斗。不。准。了。效。ひ。了。改。定。於。斗。あ。る。こ。ゆ。決。け。き
は。形。り。記。中。二。計。字。は。假。字。と。用。ひ。こ。依。例。を。く。計。ゆ。あ
就。て。云。依。説。は。朝。戸。不。者。あり。○伊。余。理。陀。多。志。を。伊。は
皆。乃。ゆ。と。ま。朝。戸。不。者。あり。○伊。余。理。陀。多。志。を。伊。は
發。語。不。て。倚。立。を。り。万。葉。十。七。一。三。十。不。安。之。可。伎。能。保。加
尔。母。伎。美。我。余。里。多。の。志。○由。布。斗。尔。波。ハ。斗。字。真。福。寺
ハ。計。と。誤。ま。り。今。ハ。舊。印。本。又。夕。戸。不。者。あり。さて。朝。戸
一。本。又。一。本。を。ゆ。依。ま。り。夕。戸。不。者。あり。さて。朝。戸
あ。を。云。く。夕。戸。不。は。云。く。ゆ。ハ。朝。の。戸。夕。ハ。此。戸。也。二。何。名
あ。は。非。次。万。葉。二。三。十。不。朝。宮。乎。忌。賜。哉。夕。宮。乎。背。賜。哉
官。也。云。く。ゆ。を。り。ゆ。云。く。ゆ。同。じ。云。さ。る。ふ。て。朝。不。戸。を
開。く。時。ゆ。を。ハ。云。く。夕。不。戸。を。開。く。時。ゆ。を。は。云。く。ゆ。云

こやふて其ハ朝夕の也云意朝夕也云は即何時
も何時も常少也云意ふを依なり俗言工も朝も晩も
きは戸子用の無けき也戸を朝也夕也尔閑閉る物
を依故尔朝夕を云む免尔御殿の御座の邊此は万
を以て云るなり契冲老朝異夕異也
云也云ハ師を朝影夕影なり云依詞なり夕異も同じ
庭也巧依をさす此を提ハハ訓也或人を朝食夕食
なりや云るみなり和岐豆紀賀を師云脇机
ふて脇息のこやなり和名抄坐卧具小几西京雜記云
漢制天子玉几公侯皆以竹木為几和名於之万都岐今
按几属又有脇息之名所出未詳也何里や云まは依が

如於志麻豆伎を押座几也云名小了即脇息なり脇
息也云名も漢籍小毛戰國策の注なり尔見えぬ
後撰集の哥小脇息を抄さす坐牙云く小右記小
を腋息也何里之を腋也脇也同心得て書
依傳書紀齊明卷小夾膝自断る由案机之脚无故
自断天武卷小高市皇子以下小錦以上大夫等賜云く
及机杖唯小錦三階不賜机和伎豆紀也云ぞ
上代より其の名なりしを稍後少を杉了りき云又
後少を脇息也云あり契冲が此句を和字舊印本小誤
依を論小さす脇机を座てこそ倚か依物を依尔余
理陀多須也何依也如何依如く聞ゆ来き也座賜布
御状も立次也云傳立也座也對牙し思牙也座
多依少安立也云るじきか

如くなれども其形小なりて是座多座を立云伝
し凡て物の形の高きを傳み立云伝例を人
の座多座形も高きもの多座然云むら妨ふか伝
傳し又古は立ながら倚座脇机を有て其もやも思
ふやなら然○斯多能き下之なり○伊多尔母賀を板
多毛か多毛て其板小毛多毛りて願多詞なり契
冲云万葉第十一云如是許恋乍不有者朝尔日尔妹之
将履地尔有申尾此意小似多り云里同八小玉切命
向恋従者公之三船乃梶柄母我を云伝類を多し
さて師云下の板云伝即脇机の板なり云云多座
か如し脇机を押し腕の下小在物於伝が故小下云
多云伝なり又思多ふ古比脇机小を脚の下小も又
板のり其を云伝多や若然ら傳上の板

天^{コノスメラミコト}皇御年壹佰貳拾肆^{三トシモチリハタチヨツミハカハ}歲御陵

をねきて下座伝を云伝を身を卑下云伝意伝
伝多や然多座を不師の説を古の意多をか多座
き○阿世表は吾兄より師云即脇机を云伝本多座
伝が如し倭建命の御哥小一松吾兄を云伝伝が如し
此言の事彼伝小云里傳北ハのさて此小如是云伝多
天皇の大御身小親きと羨み多座意伝○一首の意
多天皇比朝夕小常小倚座大御脇の下座伝脇机に
板多を為て大御身小親く近く仕奉らる傳
多なり○志都歌を高津宮段小出傳世六の
五十七兼

カ
フ
チ
ノ
タ
チ
ヒ
ノ
タ
カ
ワ
シ
ニ
アリ
在河内之多治比高鷲也。

壹佰貳拾肆歲書紀多々二十三年秋七月辛丑朔天皇
寢疾不預云々八月庚午朔丙子天皇疾弥甚與百寮辭
訣敵敵崩于大殿云々御年を見え云々允恭卷小七
云々見え云々帝王編年記云雄略天皇崩年百四此天皇百
四有疑其故者天皇安樂天皇同母弟也又今年以往百
四年者當仁德天皇六十四年丙子父允恭天皇者彼仁
德六十二年生然則三歲不可生子欽曆録云百廿四云
云然者弥可云生父之前云云是百廿四云云何
の記不見え云々或書小九十三云云云
印本真福寺本又一本云云此間小己巳年八月九日

崩也云例此細注云己巳年以書紀小云仁賢天
皇の二年なり此天皇紀年心不審し乃於書紀も
徳天皇此皇女小坐を安樂天皇の元年小大長谷命の
多々小聘賜多々其年大長谷命は卅七歳小以
あり若日下王を六十餘歳小なり賜多々御
父天皇崩坐年小生坐りて毛五十六歳をれ御
賜多々御齡小以又此天皇允恭天皇の七年小
生坐り位小坐り又此天皇允恭天皇の七年小
猪子か事を別小此記の御代小の細注小依り考ゆ
を離れ天皇丁卯年崩坐り年以書紀小了仁德天皇六
仁德天皇壬申年崩坐り年以書紀小了仁德天皇六
十年を少反正天皇丁丑年崩坐り年以書紀小了仁
仁德天皇六十五年を少允恭天皇甲午年崩坐り年
以書紀小了仁德天皇の八十二年を少雄略天皇己
巳年崩坐り書紀小了仁賢天皇の二年を少仁德天皇
小依り此天皇御年百廿四歳を少大御父允恭天皇の
五十四年小生坐り多々大御父允恭天皇の五十歳

郡又丹南郡の堺
小近道處を切

此三河野原の四圍
山崎の山崎の山崎

會原山崎の山崎
天皇の山崎の山崎

天皇の山崎の山崎
山崎の山崎の山崎

山崎の山崎の山崎
山崎の山崎の山崎

山崎の山崎の山崎
山崎の山崎の山崎

山崎の山崎の山崎
山崎の山崎の山崎

山崎の山崎の山崎
山崎の山崎の山崎

山崎の山崎の山崎
山崎の山崎の山崎

山崎の山崎の山崎
山崎の山崎の山崎

